

全国の校友に感謝

例年より25日も早く若手山に初冠雪があり、冬の近いことと被災地の仮設住宅等で不自由な生活を送っている方々の御苦勞と大変さが強く胸に迫り、やり切れない思いの日々です。

さて、このたびの東日本大震災で三陸沿岸は津波より激激的な打撃を受け、県民7300人以上が死傷・行方不明、2万棟以上が全壊という大惨事で、校友も民生委員で近所の老人を助けようとして亡くつた1名、全壊6名、大規模半壊4名が被災しました。

震災後、すぐに立命館大学校友会が組織を挙げて支援活動に取り組んでいたが、被災等の調査活動に物心両面で支援していただきました。

被災地は3ヶ月以上もライフラインが分断され、校友の安否の確認等に苦勞しましたが、7月2日の総会（長岡理事長、辻復興支援特別委員長出席）前には、被災校友も確認でき、本部校友会からの義援金と校友から寄贈された絵本を、会長、副会長、専務局長が避難先等を訪問し、手渡すことができました。

お会いした校友はもとより、御両親からも大変感謝されました。

特に、何人かの子どもを大学に進学させた母親からは、卒業生にまで支援活動をする大学は立命館大学だけですと力説され、改めて校友会と校友会員の皆さまに感謝と御礼を伝えてほしいと言われ、逆に励まされてきました。

私自身も高校の教員として、釜石・大槌・久慈に勤務したことがあり、教の子、同僚、知人、友人等で死傷・行方不明になった人も多く、何處か被災地を訪ねましたが、以前に住んだ場合が判名しない程のカレキヤ山で言葉を発すことができませんでした。

被災地はやはりライフラインは復旧し、日用品等の販売も徐々に開店しましたが、本格的な復旧・復興には気の遠くなるような時間と費用と努力が必要だと感じました。

今までに被災地に寄せられた支援や激励に改めて感謝と御礼を申し上げ、今後得の長い更なる支援と激励をお願ひ申し上げます。

御礼といたします。

平成22年10月5日

立命館大学若手県校友会
会長 菊地 宏